

1

読む 説明的文章を読む
心の底をのぞいたら
—心の研究—

名前 年 組 番

／5問

◆次の文章を読んで、問いに答えなさい。

ときには、おくびようものと呼ばれてもいいから、かしく逃げだして危険をさけるほうが、ずっと強いところの力を必要とすることだってあるのだ。そのことを、君たちは、よく考えてみる必要があるだろう。

勇気が社会的な価値を持ったものだということは、昔、社会に、さむらいや、百姓や、町人などの階級があった時代、さむらいがもつとも勇気があることを要求されていたことをみればわかる。さむらいは、おくびよう者と呼ばれることを、死ぬよりもおそれていた。おなじような場合に、町人なら逃げだしても当然なのに、さむらいは逃げられずに、自分から死なねばならなかった。こうして、つまらぬ原因で、さむらいのメンツをたもつために、殺し合いをして死んでいったものが、どれほどいただろう。

こうやって考えてみればわかることだが、全部が全部そうだとはいわないけれども、勇気と呼ぶものも、じつは、こわさの一種だということができるだろう。社会の罰をうけるこわさが、勇気のある行動と呼ばれるものに、ある人間たちをかりたてるといふわけだ。つまり、こわさにも、二種類あり、自然のままの人間のこわさと、社会の人間として持つこわさが、そうだとすることだ。社会と個人が、いつもおなじ敵をもっていれば問題はないのだけれど、ときには、社会が個人にとって敵になることもある。そこから、ひとりの人間の中で、二つの衝動の対立がうまれてくる。

このことは、別のところで、もういちど考えてみなければならなくなるだろう。

ぼくは、昔、軍人になるための学校にちよつとばかりいたことがある。それで思うのだが、どこの国の軍隊も逃げることを兵隊に真剣に教えないということは、おかしいことだ。逃げる

●線③と同じ段落に、「こわさにも、二種類あり」とあるのでそのあとの言葉を書く。

のは、本能的にやれということなのだろうか。社会的にも、逃げるのが意味のある場合は、たくさんあると思うのだが。むだに命をすてないために生きるといふことは、社会のためにもたいせつだと、君は思わないだろうか。ぼくは、君たちに、逃げるこの意味を、このあたりで、すこし考えてもらいたいと思う。メンツ＝体面。面目。

(なだいなだ「心の底をのぞいたら—心の研究—」より引用)

1 「さむらいは逃げられずに、自分から死なねばならなかった」のはなぜですか。次に続けて書きなさい。

さむらいは、逃げだして

(例) おくびよう者と呼ばれることを、死ぬことよりもおそれていたから。

2 「社会の罰を……かりたてる」とありますが、A「社会の罰をうける」とことと、B「勇気のある行動」は、さむらいの場合では、それぞれどんなことに当たりますか。

A (例) おくびよう者と呼ばれること

B (例) 殺し合いをして死ぬこと

3 「二つの衝動」とは、ひとりの人間の中に対立するどんなこわさですか。

(例) 自然のままの人間のこわさと、社会の人間として持つこわさ。

4 「逃げるこの意味」の一つとして、筆者はどのような考えを述べていますか。「〜という考え」に続くように書きなさい。

(例) 逃げてむだに命をすてないことは、社会のためにもたいせつである

という考え。 ●線④の前の段落に注意する。

2

読む 説明的文章を読む
奇想天外な魚の護身術

名前 年 組 番

／7問

◆ 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

大洋の表層を泳ぐサバの類も弱い魚である。水から揚げると、すぐ死んでしまう。「サバの生き腐れ」といわれるほどすぐまいてしまうのがこの魚である。

したがってこの魚にも、自然はいろいろの護身術をさずけている。

まずサバ（マサバ）を大皿にのせて観察してみよう。背中は青緑色だから、これは近海の海の色と一致している。つまり完全な保護色である。サバが泳いでいても目につきにくい体色である。それに背の青緑色には「く」の字の黒い斑紋が付いているが、これは海面の小波をかたどっていて意義深く感じられる。

では腹側の銀色はどうか。海にもぐって海面を下から見上げるとどうだろう。海を照らす太陽光線が全反射して、海面の下側は鏡の如く銀色に輝いている。つまりサバをはじめ多くの魚の腹側が銀色をしているのは、海の色と魚の体色をうまく一致せしめたもので、海の中のあらゆる生物をこのように仕組んだ「自然」の巧みにはただ舌を巻くのみである。

いずれにしても、海にすむ生物のすべては、互いに食いつ食われつしてその種の生命を維持してゆくが、何かの拍子で互いのバランスが破れると、どの種族によらず絶滅の悲運を辿らざるを得ないことは陸上動植物でも同様である。自然はあらゆる英智をしばって各生物の存在と繁栄に力を貸しているが、しばしば人間の着想では思いもよらないような工夫をわれわれに教えてくれることがある。それはトビウオの空中飛行である。

敵に追われた魚が水の世界から空中へおどり出て、距離数百メートルのグライダー的な飛行を行う例など、安全に身を守る方法にこんな突飛な構想を誰がいだいたかと、ただ啞然とする

のみである。

斑紋＝まだらの模様。
英智＝すぐれた知恵。

啞然＝言葉が出ないほどびっくりする様子。

（末広恭雄「奇想天外な魚の護身術」より引用）

1 「完全な保護色」とありますが、サバの場合
はどのようなになっていますか。次の（ ）に
当てはまる言葉をそれぞれ書きぬきなさい。

・サバの背中の色が（ ） 近海の海（ ）の色
の（ ） 青緑（ ）色になっている。

・サバの腹の色が（ ） 海面の下側（ ）の

（ ） 銀（ ）色になっている。

●保護色とは、動物が敵から気づかれにくくするため
にもつと考えられる体色のことである。

2 「自然はあらゆる英智をしばって各生物の存
在と繁栄に力を貸している」とありますが、文
章中の言葉を使って、その具体的な例となるも
のを十字以内ずつで二つ書きなさい。

（例）サバの体色と黒い斑紋

（例）トビウオの空中飛行

●前半はサバについて、後半はトビウオについて書かれている。

3 この文章で筆者が最も述べたいことは、どの
ようなことですか。次に続けて書きなさい。
自然は生物にいろいろの護身術を、

（例）とても巧みに与えていて、なかには
（トビウオの空中飛行のように）人間
には思いもよらないような突飛な構想
もある。

※「突飛な構想」は「工夫」でも可。「自然はあらゆる英
智を」教えてくれることがある」の部分 がまとめられ
ていること。

3

読む 説明的文章を読む 子どもと自然

名前 年 組 番

／4問

◆ 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

幸島には昔からサルが住んでいて、その生態観察・研究のため、一頭ずつに名前がつけられている。カミナリはサルの名前である。

① カミナリにすれば、海は危険だから入ってはならない、という習慣を身につけてきた。若い者が甘い餌に釣られて海へ入るとは、なんと愚かな行為だと思っているだろう。一方、若者たちは、海へ入れば気持ちがよいしピーナツも拾えるのに、なんとという頑固なおやじだろうと小馬鹿にしているだろう。もちろんサルたちは、こんな人間臭い考え方をしているわけではないが、彼らが感じているもやもやとした気持ちを付度して代弁すれば、こういうことになるうか。

② 海へ入るのは、確かに危険なことだ。とくに荒れているときは、突然大波が襲い、沖合にさらわれるということもあるう。しかし、子どもたちは海に入るにより、年寄りたちが知らない新しい世界を拓いたのだ。泳ぐ、水に潜るといった楽しさは、山の中には絶対に味わうことができない醍醐味である。

③ 岩の上のリーダーと海の中の若いサルたちの構図から、人間社会での大人と子どもの関係について、いくつかの教訓を得ることができる。つまり、この構図は、そっくりサルを人間に置き換えることができるということだ。年がいくと保守的になり、若い者の行動型や思考様式が理解できなくなる。そして、若者との間に価値観の上で大きなギャップができ、お互いに相手の行動を非難しあうようになってしまう。こうなると、もはや水と油の関係になり、相互の疎外感を深めるだけである。

④ サルたちの間では、このギャップはどうしようもなく、埋め合わせることができない性質のものだ。だが、人間はそうあってはならないし、ギャップを埋めて相互理解の土俵を築くことが

できるはずである。年がいても、柔軟な思考と深い理解を持つことができるのが、人間の特性である。

付度＝他人の気持ちをおしはかること。

醍醐味＝本当の楽しさ。 思考様式＝考え方の型。

(河合雅雄「子どもと自然」より引用)

① 「こんな人間臭い考え方」とは、だが、どのように考えることを指していますか。例になり、もう一つの考えを、文章中の言葉を使って書きなさい。

例 カミナリが、若者たちの行為を愚かだと考

えること。
(例) 若者たちが、カミナリをなんとという頑固なおやじだろうと考えること。

線①の「こんな」に着目し、その内容を前からとらえる。
②段落で、筆者はどのような立場で考えを述べていますか。当てはまるものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。

(ウ) ア 年寄りの考えを肯定する立場。

イ 子どもの考えを肯定する立場。

ウ 年寄りと子ども両方の考えを肯定する立場。

エ 年寄りと子ども両方の考えを否定する立場。

③ 「水と油の関係」の様子を表す部分を、文章中から一続きの二文で探し、初めの八字を書きなさい。●「水と油の関係」とは、反発しあって互いに混じり合わない関係のことである。

年	が	い	く	と	保	守	的
---	---	---	---	---	---	---	---

④ この文章で、人間はどのようにありたいと筆者は述べていますか。「人間は、」という書き出しに続けて、文章中の言葉を使って書きなさい。

人間は、

(例) 年がいても、柔軟な思考と深い理解を持つ特性を生かせるようでありたい。

●筆者の言いたいことは、最後に書かれていることが多いということ覚えておこう。

1

読む 文学的文章を読む
媽祖の贈り物

名前 年 組 番

／4問

◆次の文章を読んで、問いに答えなさい。

入って来た男はマーミヤオを揺り起こした。その男のうしろに、もう一人立っているようだった。

「誰だい」と、マーミヤオは寝呆け声を出した。「おれだよ、母さん、シーチイだよ。ボッティもいるよ」

彼のうしろに立っている背の高い男は、たしかにボッティだった。

「おや、お前たち、除隊したのかい」

マーミヤオがいちばんはじめに考えたのは、帰って来た息子達に、彼女が飲まないでとっておいたお茶を、いれてやることだった。彼女は暗い家の中で、やっと立ちあがった。手を動かしても誰にも当たらない。シーチイ、ボッティと、声に出して呼んでみた。だが、息子たちはもうそこにはいないようだった。戸口にさげた麻袋のむこうが、すこし明るんで見える。家の中は誰が潜んでいても見えないほど暗いが、しかし、いればわかるはずだった。

マーミヤオは麻袋を掻きあげて外に出た。そこが明るかったのは、夜が明けかけているせいではなかった。それは、いっぺんに眼がさめてしまうように、あかるい月明りのせいだった。小川のへりの楊柳の樹や、土地公の廟が、ひるまのようによく見えた。川は黒い空の下に、光の帯のように伸びていた。

小川の上には見馴れないものが浮いていて、マーミヤオの眼を惹いた。彼女は引かれるように、そばまで行って見た。それは川岸に頭をくつつけるようにして、なかば浮んでいる二つの屍骸だった。マーミヤオはしゃがんで、足もとの屍骸を見た。それがシーチイとボッティだったのは、間違いないことだ。二人の息子は、どこで死んだのかはわからないが、媽祖が屍骸を水に乗せて届けてくれたのだということは、

マーミヤオにはすぐわかった。

土地公の廟（その）土地の神様を祭るやしろ。

媽祖は海上の安全を守る神。

（日影文吉「媽祖の贈り物」より引用）

1 「お前たち」とは、誰のことですか。文章中の言葉を使って書きなさい。

（例）（マーミヤオの息子の）シーチイとボッティ

2 「やっと立ちあがった」とありますが、どうするために「立ちあがった」のですか。「ため」の形で書きなさい。

（例）息子達にとっておいたお茶をいれてやるため。

線②の直前の文に着目する。

3 「すこし明るんで見える」のは、なぜですか。次に続けて書きなさい。

家の外は、

（例）（いっぺんに眼がさめてしまうほど）月明りがあかるかったから。

線③の次の段落にその理由が書かれている。「なぜ」という問いに対して「から」「のため」で答える。この小説の題名は「媽祖の贈り物」ですが、どんなことが「媽祖」からの「贈り物」なのか。文章中の言葉を使って書きなさい。

（例）どこで死んだのかわからないシーチイとボッティの屍骸を、媽祖が水に乗せてマーミヤオのもとに届けてくれたこと。

※「二人の屍骸を届けてくれたこと」など同趣旨であればよい。「屍骸」「媽祖」は誤字でも可。

2

読む 文学的文章を読む サーカスの馬

名前 年 組 番

／4問

◆次の文章を読んで、問いに答えなさい。

僕はムシロ敷きの床の上に、汚れた湿っぽい座ぶとんをしいて、熊のスモウや少女の綱わたリなど同じようなことが果てもなく続く芸当を、ぼんやり眺めていた。が、ふと場内をみわたしながら僕は、はっとして眼を見はった。……あの馬が見物席の真ん中に引っぱり出されてくるのだ。僕は団長の親方が憎らしくなった。いくら、ただ食べさせておくのが勿体ないからといって、何もあんなになった馬を見せものにしたくたっていないじゃないか。

馬は、ビロードに金モールの縫いとりのある服を着た男にクツワを引かれながら、申し訳なさそうに下を向いて、あの曲がった背骨をガクガクゆすぶりながらやってくる。鞍もつけずに、いまにも針金細工の籠のような胸とお尻とがバラバラにはなれてしまいそうな歩き方だ。……しかし、どうしたことが、彼が場内をひと廻りするうちに、急に楽隊の音が大きく鳴り出した。と、見ているうちに馬はトコトコと走り出した。

まわりの人は皆、眼を見はった。楽隊がテンポの速い音楽をやり出すと、馬は勢いよく駆け出したからだ。すると高いポールの上にあがっていた曲芸師が、馬の背中に——ちょうどあの弓なりに凹んだところに——飛びついた。拍手がおこった。

おどろいたことに馬はこのサーカス一座の花形だったのだ。人間を乗せると彼は見ちがえるほどイキイキした。馬本来の勇ましい活発な動作、その上に長年きたえぬいた巧みな曲芸をみせはじめた。楽隊の音につれてダンスしたり、片側の足で拍子をとるように奇妙な歩き方をしたり、後足をそろえて台の上に立ち上がった……。いったいこれは何としたことだろう。あまりのことに僕はしばらくアツケにとられていた。けれども、思いちがいがハッキリしてくる

につれて僕の気持ちは明るくなった。

息をつめて見まもっていた馬が、いま火の輪くぐりをやり終わって、ヤグラのように組み上げた三人の少女を背中に乗せて悠々と駆け廻っているのを見ると、僕はわれにかえって一生懸命手を叩いている自分に気がついた。

(安岡章太郎「サーカスの馬」より引用)

1 「僕は団長の親方が憎らしくなった」とありますが、それはなぜですか。() に当てはまる言葉を書きなさい。

線①のあとに、「憎らしくなった」理由が書かれている。

(例) 見せものになっているから。

※「見せものにする」と「が押さえられていればよい」。

2 「アツケにとられていた」とありますが、このときの「僕」の気持ちを表す言葉を、文章の中から十六字で書きぬきなさい。

い	っ	た	い	こ	れ	は	何
と	し	た	こ	と	だ	ろ	う

3 「アツケにとられる」とは、事の意外さに驚きあきれることである。「思いちがい」とは、どのようなことですか。「僕は、馬が」という書き出しに続けて書きなさい。

僕は、馬が

(例) 見せものにされていると思っていたが、実は馬はこのサーカス一座の花形であつたこと。

4 「一生懸命手を叩いている」とありますが、「僕」はどのような気持ちで拍手をしていますか。当てはまるものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。

(エ)

ア 馬の本来の実力に対しての共感。

イ 馬と比べて情けない自分への励まし。

ウ 馬への同情が無意味だったことへの失望。

エ 巧みな曲芸を披露する馬への賞賛と感動。

3

読む 文学的文章を読む 形

名前 年 組 番

／4問

◆次の文章を読んで、問いに答えなさい。

その明るる日、摂津平野の一角で、松山勢は、大和の筒井順慶の兵としのぎを削った。戦いが始まる前、いつものように狸々緋の武者が唐冠のかぶとを朝日に輝かしながら、敵勢をしりめにかけて、大きく輪乗りをしたかと思うと、駒の頭を立て直して、一気に敵陣に乗り入った。

吹き分けられるように、敵陣の一角が乱れた所を、狸々緋の武者は槍をつけたかと思うと、早くも三、四人の端武者を突き伏せて、また悠々と味方の陣へ引返した。

その日に限って、黒革絨の鎧を着て、南蛮鉄のかぶとをかぶっていた中村新兵衛は、会心の微笑を含みながら、狸々緋の武者の華々しい武者ぶりを眺めていた。そして、自分の形だけすらこれほどの力を持っているということに、かなり大きい誇りを感じていた。

彼は、二番槍は自分が合わそうと思ったので、駒を乗り出すと、一文字に敵陣に殺到した。

狸々緋の武者の前には、戦わずして浮き足だった敵陣が、中村新兵衛の前には、びくともしなかった。

そのうえに彼らは、狸々緋の「槍中村」に突き乱された恨みを、この黒革絨の武者の上に復讐せんとして、たけりたっていた。

新兵衛は、いつもとは、勝手が違っていることに気がついた。いつもは虎に向かっている羊のようなおじけが、敵にあった。彼らがうろたえ血迷うところを突き伏せるのに、なんの造作もなかった。今日は、彼らは対等の戦いをするときのように、勇みたっていた。どの雑兵も十二分の力を新兵衛に対し発揮した。二、三人突き伏せることさえ容易ではなかった。敵の槍の矛先が、ともすれば身をかすった。新兵衛は必死の力を振るった。平素の二倍もの力をさえ振るった。が、彼は、ともすれば突き負けそう

② になった。手軽にかぶとや狸々緋を貸したことを後悔するような感じが、頭の中をかすめたときであった。敵の突き出した槍が、絨の裏をかいて彼の脾腹を貫いていた。

狸々緋は少し黒味を帯びた深紅の色。作中ではその色の羽織のことを指す。

唐冠は古代中国の冠の形をまねたかぶと。

黒革絨は鎧の細長い板を、濃紺や黒の革ひもでつなぎ合わせたもの。

南蛮鉄は室町時代末期に、外国よりもたらされた鋼鉄。

（菊池寛「形」より引用）

1 新兵衛の行動に着目して、この文章を二つに分けると、後半はどこから始まりますか。後半の初めの五字を書きなさい。

彼は、二番

（句読点も一字と数える。）

2 新兵衛の行動に着目してという問いに注意して二つに分ける。線a～dの中で「中村新兵衛」を表しているものは、どれですか。次から一つ選び、その記号を書きなさい。

（ d ）

3 「会心の微笑を含み」とありますが、このように微笑したのはどうしてですか。次に続けて文章中の言葉を使って三十文字程度で書きなさい。自分の形だけでも、

（例） 大きな力を持っているということにかなり大きい誇りを感じていたから。

※「大きな力」は「これほどの力」でも可。

4 新兵衛が、「かぶとや狸々緋を貸したことを後悔」したのは、どのようなことに気づいたからですか。次の（ ）に当てはまる言葉をあとから一つ選び、その記号を書きなさい。

うわべのものと思っていたかぶとなどの「形」

が、実は、（ イ ）ということ。

ア 敵を勇気づけていた

イ 自分の力を支えていた

ウ 自分を勇気づけていた

エ 自分を華々しくしていた

線a～cは、新兵衛からかぶとや狸々緋を借りた若い士である。

1

読む 短歌を読む 短歌を味わう

名前 年 組 番

/ 7 問

◆ 次の短歌を読んで、問いに答えなさい。

① 金色のちひさき鳥のかたちして

銀杏ちるなり夕日の岡に

与謝野晶子

② 牡丹花は咲き定まりて静かなり

花の占めたる位置のたしかさ

木下利玄

③ 君にちかふ阿蘇の煙の絶ゆるとも

万葉集の歌ほろぶとも

吉井 勇

④ 白鳥は哀しからずや空の青

海のをにも染まらずただよふ

若山牧水

⑤ みちのくの母のいのちを一目見ん

一目みんとぞただにいそげる

斎藤茂吉

1 ①～⑤の短歌の中で、「字余り」のものを一首選び、その番号を書きなさい。

● 初句の「君にちかふ」が六音になっている。

2 ①～⑤の短歌の中で、次の句切れのものを一首ずつ選び、それぞれ番号を書きなさい。

I 初句切れ

II 二句切れ

III 三句切れ

3 ②の短歌で使われている表現技法として、正しいものを次から一つ選び、記号を書きなさい。

い。

A 比喩法

I 対句法

ウ 反復法

エ 体言止め

● 「たしかさ」という体言(名詞)で止められている。

4 次の説明に合う短歌を、①～⑤の中から一首ずつ選び、それぞれ番号を書きなさい。

I 亡くならうとする母親に、生きているうちに会おうと、ひたすら急ぐ気持ちをうたっている。

II 雄大なものをたとえにあげて、一途で純粋な作者の恋心を明快にうたいあげている。

1

読む 古文を読む 竹取物語 1

名前 年 組 番

/ 100 点



◆ 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

昔、竹を取って生計を立てていた竹取の翁が、根元の光る竹を見つけた。その筒の中には、かわいらしい小さな女の子が座っていた。

● 「知りぬ」の直後「子となり給ふべき人なめり」ということが分かったため、

【古文】 「現代語訳」から当てはまる部分を探す。

翁いふやう、「我あさごと夕ごとに見る竹の中に^②おはするにて、^③知りぬ。子となり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。妻の女にあづけて養はす。^④うつくし事かぎりなし。いとをさなければ籠に入れて養ふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節を隔ててよこ^⑤に金ある竹を見つくる事かさなりぬ。かくて翁やうやう豊かになり行く。

(「竹取物語」より引用)

【現代語訳】

竹取の翁が言うことには、「わたしが毎日朝夕見る竹の中にいらっしゃるので、分かった。(わたしの) 子どもにおなりになるべき人なのだろう。」と、てのひらにのせて自分の家へ連れて来た。(そして) 妻に(その子を) 任せて養育させる。(その子の) かわいらしいことはこの上ない。とても小さいのでかごの中に入れて育てる。

竹取の翁は、(相変わらず) 竹を取っていたが、この子を見つけてからは竹を取ると、節と節との間の空いている部分に黄金の入っている竹を見つけることが何度もあった。こうして翁はだんだん金持ちになっていく。

子どもは成長してたった三か月ほどで一人前になった。その姿は輝くように美しく、「なよ竹のかぐや姫」と名づけられた。

②は18点、④・⑤は各20点×2、他各6点×7

1 「いふやう」、「おはする」、「あづけて」、「やうやう」を、それぞれ現代仮名遣いに直して書きなさい。

- ① () いうよう 直す字が二字あることに注意する。
- ② () おわする ()
- ③ () あずけて ()
- ④ () ようよう ()

2 「知りぬ」とありますが、翁にはどのようなことが分かったのですか。

(例) この女の子は自分の子どもになる人だということ。

※「この女の子を自分の子どもとして育てるべきだということ。」など同趣旨可。

3 「家へ持ちて来ぬ」とありますが、だれがだれを家に連れて来たのですか。次の () に当てはまる言葉を書きなさい。

() 竹取の翁 () が、() 竹の中 () にいた () 小さな女の子 () を連れて来た。

※「翁」「光る竹」「かわいらしい女の子」など同趣旨可。

4 「うつくし事かぎりなし」とは、どのような意味ですか。【現代語訳】中から書きぬきなさい。

(その子の) かわいらしいことはこの上ない

5 「この子を見つけて後」、竹取の翁にはどのようなできごとがありましたか。

(例) 竹を取りに行つて、節と節との間の空いている部分に黄金の入っている竹を何度も見つけたこと。

※「金持ちになった」だけでは不可。

● 【現代語訳】の二つ目の段落から読み取る。

古文の意味を現代語訳中からぬき出す場合は、過不足なく書くことが大切である。
 「たしかめプリント」めあて 古文の話の流れを理解する。

2

読む

古文を読む 竹取物語2

名前 年 組 番

/ 100 点



(各20点×5)

◆ 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

月の都の人がかぐや姫を迎えにくるの
 で、どうしても帰らなければならぬ。あ
 る夜、天人たちがかぐや姫を迎えに降りて
 きた。

【古文】

天人の中に、持たせたる箱あり。天の羽衣入
 れり。またあるは、不死の薬入れり。一人の天
 人言ふ、

「壺なる御薬奉れ。きたなき所の物きこしめし
 たらば、御心地あしからむものぞ。」

とて、持て寄りたれば、いささかなめたまひて、
 少し、形見とて、脱ぎおく衣に包まむとすれ
 ば、ある天人包ませず。御衣を取り出でて、着
 せむとす。

(「竹取物語」より引用)

【現代語訳】

天人の中(の一人)に、持たせている箱があ
 る。天の羽衣が入っている。また別には、不
 死の薬が入っている。一人の天人が言う、
 「壺に入っているお薬をお飲みください。きた
 ない世界の食べ物をお召し上がりになったの
 で、ご気分が悪いことでしょう。」
 と言って、(薬を) 持って(そばに) 寄ったと
 ころ、(かぐや姫が) 僅かにおなめになって、
 (薬を) 少し、形見ということで、脱いでおく
 着物に包もうとすると、(そこに) いる天人が
 包ませない。天の羽衣を取り出して、着せよう
 とする。

1

「天の羽衣」とありますが、だれに着せるもの
 ですか。【現代語訳】中から書きぬきなさい。
 (かぐや姫)

2

「きたなき所の物きこしめしたれば」について
 答えなさい。

(1) 「きたなき所」とは、どこですか。当ては
 まるものを次から一つ選び、その記号を書
 きなさい。 (エ)

- ア これから、天人たちが行く所。
- イ 天人たちがここに来る前にいた所。
- ウ これから、かぐや姫が行く所。
- エ 今、かぐや姫がいる所。

(2)

「きこしめしたれば」の意味を【現代語訳】
 中から書きぬきなさい。
 (お召し上がりになったので)

3

「包ませず」とありますが、天人は何を包ませ
 なかったのですか。【古文】中から四字で書き
 ぬきなさい。

不	死	の	薬
---	---	---	---

●【現代語訳】を参考にし、読み取る。

4

この文章に書かれていることと合っているも
 のを次から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 天人は不死の薬を僅かになめた。
- イ かぐや姫は天の羽衣をすぐに着た。
- ウ 天人は天の羽衣と不死の薬を持ってきた。
- エ かぐや姫はとても気分が悪かった。

●「不死の薬を僅かになめた」のはかぐや姫である。古
 文では主語が省略されている。

3

読む 古文を読む
沙石集

名前 年 組 番

/ 100 点



◆ 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

ある山寺にけちな和尚がいた。小僧には「食べたら死ぬものだ」と言っておいて、一人で飴を食べていた。自分も食べたいと思っていた小僧は、和尚が外出したときに棚から飴を下ろしたところ、こぼして着物や髪に付けてしまう。十分に食べてから、和尚が大切にしている水瓶をわざと割った。和尚が帰ると、小僧はさめざめと泣いて見せた。

【古文】

「何事に泣くぞ」と問へば、「大事の御水瓶を、あやまちに打破りて候ふ時に、いかなる御勘当かあらむずらむと、口惜く覚えて、命生きてもよしなしと思ひて、人の食へば死ぬと仰せられ候ふ物を、一杯食へども死なず、二、三杯までたべて候へども大方死なず。はては小袖に付け、髪に付けて侍れども、未だ死に候はず」とぞ云ひける。飴は食はれて、水瓶は破られぬ。慳貪の坊主得るところなし。児の智恵ゆゆしくこそ。学問の器量も、無下にはあらじかし。

(無住一円「沙石集」より引用)

【現代語訳】

「どうして泣いているのだ」と(和尚が)尋ねると、「大切な水瓶を、②壊してしまったので、どんなおしかりがあるだろうと思うと、③思われて、生きていてもしかたがないと思ひ、人間が食べたなら死ぬとおっしゃった物を、一杯食べたのですが死なないので、二、三杯食べましたがまったく死ぬ気配がありません。ついには小袖に付け、髪にまで付けたのですが、まだ死なないのです」と言った。飴は食べられてしまい、水瓶は割られてしまった。けちな和尚はいいところがない。子どもの知恵は大したものだ。学問の才能も、そうひどいことはないだろう。

① 問へば、「食はれて」を、それぞれ現代仮名遣いに直し、ひらがなで書きなさい。

- ① () とえば
⑤ () くわれて

② ※ひらがなでなければ不正解。語頭と複合語以外の八行はワ行に改める。
② 「あやまちに」、「口惜く」の意味を、それぞれ書きなさい。

- ② () (例) まちがつて
③ () (例) 残念に

③ ※②「うっかりと」、③「くやしく」など同趣旨可。
③ 人の食へば死ぬと仰せられ候ふ物」について答えなさい。

(1) 和尚は何についてこう言ったのですか。「古文」の中から書きぬきなさい。

- () 飴 ()
(2) なぜ和尚は、「人間が食べたなら死ぬ」と言ったのですか。

(例) 飴を独りじめしたかったから。

※「小僧に飴を食べられなくなかったから。」など同趣旨可。

④ この話はどのようなところがおもしろいのですか。次の空らん当てはまる言葉を書きなさい。

小僧は和尚が食べたなら死ぬと言っていた物が何なのか知っていて食べたのだが、和尚にしかられないように、その言葉を利用して、

(例) 大事な物を壊してしまったので死のうと思つてそれを食べたのだ

と言いつけたところ。

※「死のうと思つた」など同趣旨可。

●前後の言葉にうまく続くように□の中に言葉をまとめよう。

六、次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

原爆の直後、愛する人の行方がわからず、必死で探す人が書いた伝言の文字には、何が写されているのか。発見された伝言を取材者として初めて見たとき、私は正直途方にくれた。貴重な原爆の遺物であるという意味で迫力は感じた。だが、何が書いてあるのか文字で追うのさえ容易ではない。どこからどこまでが一つの伝言なのかもわからない。名前はいくつか読めるが、書いた人の名前なのか、探している人の名前なのかもわからない。その人がその後どうしたのかはもうろんわからない。

しかし、取材が進み、家族などの関係者が見つかって、彼らと一緒に書かれた文字の前に立ったとき、驚くべきことが起こった。彼らはいとも簡単にそのかすれた文字を読み、「ああそうだったのか。」とつぶやいた。そして涙を流した。

それを横で聞きながら私は、もう一度、その文字を眺めた。涙が出た。書家でもなければ芸術家でもない人が書いた、しかもただ人を探すという目的のために書いた、文章ともいえない文字が、人の心をこんなに揺さぶるのか。半世紀の時を超えて、伝言の文字の中から「あの日」があふれ出た瞬間だった。

(井上恭介「壁に残された伝言」より)

七、次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

そして次の瞬間、光の速さで外に放り投げた。

「ばいばい。」

途中まで身動きひとつしなかったセミは、放り出された空中で我に返ったように羽を広げ、ジジジッと鳴きながら、そのまま遠くまで飛んでいった。その去り際の鳴き声は、クラスの喧噪の中で無事に①かき消された。

セミが瀬尾くんを②守りぬいた私たちは握手でも③交わしたい心境で、詰めていた息を大きく吐き出したの④だった、やりましたよ、黒岩先生。

そのとき、瀬尾くんが初めて⑤振り返った。瀬尾くんはトリノを⑥見たかと思ふと、小さな声だったけれどはつきりと、

「ありがとう。」

終止形

そう言った。

私とトリノは驚いて、なにも⑦言えなかった。トリノは立ったまま⑧座れなくなっている。

「*座っていいぞ、鳥野。」

黒岩先生が妙な注意の仕方をした。

トリノは人さし指でずれたメガネを直すと、ようやく先生の言葉に従った。

(戸森しるこ「セミロングホームルーム」より)

(一) この文章は、いくつかの段落、文から成っているか。それぞれ数字で答えなさい。

段落 一 四 一 文 一 十四

(二) 「原爆の直後、愛する人の行方がわからず、必死で探す人が書いた伝言の文字には、何が写されているのか。」の中から、名詞を全て抜き出せ。

伝言、文字、何、必死、行方、発見、

(三) 一線①から⑧の品詞をそれぞれ漢字で答えなさい。主語にのりかたの

①	名詞	②	接続詞
③	名詞	④	名詞
⑤	副詞	⑥	名詞
⑦	連体詞	⑧	感動詞

(四) 一線アからエの名詞の種類を答えなさい。

ア	代名詞	イ	代名詞
ウ	数詞	エ	普通名詞

(五) 「書家でもなければ芸術家でもない人が書いた、しかもただ人を探すという目的のために書いた、文章ともいえない文字が、人の心をこんなに揺さぶるのか。」の中から、副詞を抜き出さない。また、それが修飾している文節も抜き出さない。

副詞 一 探す

(一) 「そして次の瞬間、光の速さで外に放り投げた。」を単語に分けなさい。

そして次の瞬間、光の速さで外に放り投げた。

(二) 「途中まで身動きひとつしなかったセミは、放り出された空中で我に返ったように羽を広げ、ジジジッと鳴きながら、そのまま遠くまで飛んでいった。」の中から動詞をそのままの形で抜き出し、それぞれの活用形を書きなさい。

動詞	活用形
放り出す	未然形
返す	未然形
広げ	連用形
鳴き	連用形
飛ん	連用形
い	連用形

放り出す	未然形
返す	未然形
広げ	連用形
鳴き	連用形
飛ん	連用形
い	連用形

(三) 一線①から④の単語の中で、品詞が異なるものはどれか。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

(四) 一線アからクの動詞について、活用形と活用の種類をそれぞれ漢字で書きなさい。↓ カッコ内は活用形と活用の種類をそれぞれ漢字で書きなさい。

活用形	活用の種類
ア 一連用形	五段活用
イ 一連用形	上二段活用
ウ 一終止形	五段活用
エ 一連用形	五段活用
オ 未然形、下一段活用	カ 未然形、下一段活用
キ 連用形、五段活用	ク 連用形、サ行変格活用

八、次の形容詞、形容動詞の活用表を完成させなさい。

語例	語幹	活用語尾				
		未然形	連用形	終止形	連体形	假定形
早い	はや	(は)る	(は)る	(い)	(い)	(け)ぬ
綺麗だ	綺麗	(き)る	(き)る	(だ)	(な)	(な)ら
元気です	綺麗	(き)る	(き)る	(だ)	(な)	(な)ら
主な続き方	う	(う)る	(う)る	(と)	(と)き	(ば)

九、次の文章の中から形容詞を抜き出し、その形容詞の活用形を書きなさい。
彼は言った。「新しい時代の考え方もよからう。しかし、ただ楽しければそれでよい、というのは正しくないと思う。」彼の表情はかわしかった。

形容詞
新しい
よからう
楽しけ
正しく
いい
かわ
活用形
連体形
終止形
終止形
終止形
終止形
終止形

十、形容動詞「元気だ」を活用させて書きなさい。また、活用形も書きなさい。

(一) 嫌なことがあっても、僕は「元気だ」。(終止形)
(二) もちろん、昨日も「元気だ」。(連用形)
(三) 明日も「元気だ」。(連用形)
(四) 「元気だ」(ば、なんでもできる)。(連用形)
(五) 「元気だ」(な、人と思われた)。(連用形)
(六) 僕は、本当に「元気だ」(うか)。(連用形)
(七) 「元気だ」(ないかもしれない)。(連用形)

十一、次の文章から形容動詞を抜き出し、その形容動詞の活用形を書きなさい。
彼は若いころたいへん短気で、おだやかだったという印象はまったくなかった。しかし、年老いてからは平凡に暮らしている。体がそれほど健康なら、気持ちもさぞかしなごやかだろう。

形容詞
短気
おだやか
平凡
健康
なごやか
活用形
連体形
連用形
連用形
連用形
連用形
連用形

十三、次の表を埋めなさい。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	假定形	命令形
です	(で)す	(で)し	(です)	(です)	○	○
ます	(ま)せ	(ま)し	(ます)	(ます)	○	(ま)せ
ない	(な)か	(な)く	(ない)	(ない)	○	○
ようだ	(よ)うだ	(よ)うに	(よう)だ	(よう)な	○	○

十四、次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

こうして考えてみると、生命が育ま^①れる条件がみごとにそろつ^②た地球は、かげがえのない星^③だということがわかり^④ます。私たちはまず、「奇跡の星」地球を大切にしていくなにより重要^⑤です。そして、地球の外に目を回けると、いずれは火星が第二の「奇跡の星」になる可能性を秘めているのです。

(一) 一線の助動詞の意味を書きなさい。その助動詞が複数の意味を持つ場合、ここで適しているものを書きなさい。

①「受り身」
②「存続」
③「断定」
④「丁寧」
⑤「断定」

地球が生命を育む
地球が生命を育む